

特集：ジェンダーと地理学

終わらない「問い」

—「空間・場所・ジェンダー関係」再考—

石塚 道子

1 はじめに

リンダ・マクドウェルが、「どこにもない場所 nowhere」からの中心を持たない相対主義の見解、「どこにもある場所 everywhere」からの啓蒙的な見解に対して、フェミニスト地理学者はすべてが「どこかある場所 somewhere」からの見解であることを主張すると言ったのは1993年のことであった(マクドウェル 2002/1993b:72)。「空間・場所・ジェンダー関係」と題する二部構成の展望論文¹⁾において彼女は、合理主義あるいは経験主義フェミニズム、反合理主義あるいはフェミニスト・スタンドポイント理論、ポスト合理主義あるいはポストモダン・フェミニズムという三つの認識論的見地がフェミニズム研究を区別してきたという視点に立って、1980年代のフェミニスト地理学研究を批判的に検討したうえで1990年代の課題を展望した。その第2部の結語の後半部分「スタイルを損なうか衣服をつくり直すか？」において彼女は、現状ではフェミニズムとフェミニスト地理学がいかに地理学という衣服自体を引き裂き、異なる形に作り直すかについて結論するまでにはいかならないことを認めたとうえで、冒頭のように言及し、さらに「何がより地理学的な見解でありうるのか」と問いかけ、フェミニズム研究が提供する豊かさの可能性と知的な問題提起は疑問の余地がないと終章を締めくくったのである。以来15年以上もの時が経過したが、この「問」はすでに「答えられた問い」となったのだろうか。

この15年間でフェミニズムが創設した分析概念である「ジェンダー」は地理学研究にしっかりと定着したように見える。少なくともかつてジャンス・モンクラが列挙したようなジェンダー・ブラインドな状況はもはや過去のものとなった(モンク&ハンソン 2002/1982)。英語圏地域ではフェミニスト地理学あるいはジェンダーをタイトルに掲げた本が数多く刊行されるようになったし、1994年に創刊された学術誌 Gender, Place and Cultureにとどまらず、さまざまな地理学関係の学術誌にジェンダー、フェミニスト地理学研究論文が掲載されるのは少しも珍しいことではなくなっている。後期中等教育、高等教育におけるフェミニスト地理学カリキュラムが編成され、それに向けたテキストやリーディングスの開発も進んでいる。日本においてもジリアン・ローズの著作『フェミニズムと地理学—地理学的知の限界』の翻訳(2001)、欧米のフェミニスト地理学論文のアンソロジーである『ジェンダーの地理学』(2002)の刊行、ジェンダー視点からのさまざまな個別研究、欧米のフェミニスト地理学研究動向の紹介や理論的検討、日本のジェンダー地理学研究動向などが蓄積されてきた(吉田 1996, 2004, 2006; 影山 2006; Murata 2005)。しかし、この現状は、「マクドウェルの問いがすでに答えられた」ことを示しているのだろうか。

1990年にジュディス・パトラーが『ジェンダー・トラブル』においてジェンダー、セックスが社会的構築物であること、つまり性の二分法を徹底的

に解体する議論を提起して以来、社会学、政治学、哲学、文学など諸個別科学におけるフェミニスト分析自体も大きく変化した。1993年の時点でマクドウェルがすでに指摘していたように、フェミニズムにおいてはジェンダーという分析カテゴリーの特権性批判や構築性、ジェンダー内部の差異の多様性をめぐる議論が生起していたが（マクドウェル 2002/1993b：62）、今日では「ジェンダー」は、男女間、女性相互、男性相互の関係性をふくむ複雑で多面的な学際領域であるという理解が進み、『女性学 Women's Studies』を支持する人びとからの異論がないわけではないが、『ジェンダー・スタディーズ』という用語が普及するようになっている」（ピルチャー&ウィハラン 2009/2004：4）。いまやフェミニズムは「複数形以外では究極的に語れなくなった」が、それは「女性抑圧の根絶に取り組むことで一致しても問題にアプローチする哲学または政治の基盤は同一でないという意味が込められている」からである（ピルチャー&ウィハラン 2009/2004：61）。

また、経済のグローバル化のもとで急速に「移民の女性化」が進展し、その移動過程を研究対象とする国際移動研究の蓄積から「グローバリゼーションの展開が世界的規模でのジェンダーの再定義化、再配置を伴っている」ことが検証されたことにより、フェミニスト政治経済分析の主要課題が、グローバル資本主義規定にあること、言い換えれば、「グローバル資本主義そのものの基盤において、ジェンダーの統合=排除が位置づけられている」ことを解明することにあるということも明らかになってきている（足立 2005b：105）。

本論は、上述したようなジェンダー概念の変化とそれがもたらしたフェミニズムの複数化のなかでフェミニスト分析の変化が、現時点において「何がより地理学の見解でありうるのか」というマクドウェルの問いの答えにどこまで反映しているのかを見極めようとする試みである。このためにまず1993年のマクドウェルの論文「空間・場所・

ジェンダー関係：第2部—アイデンティティ、差異、フェミニスト幾何学と地理学—」とくに後半の「(3) 差異の考察」から(8)「むすび：ローカルな知/ジェンダー化された知」を中心に再吟味し、彼女の「問い」、言い換えれば、ポストモダン・フェミニスト地理学を確立していくうえで何が問題だったのかを再確認することによって彼女の「問い」の今日的意義を考察し、次いで1990年代から今日までのグローバリゼーションの進展に伴って変化してきたフェミニスト分析と地理学へのその反映を検証していく。

II マクドウェルの「問い」とは何だったのか？

マクドウェルの展望論文第2部の「(3) 差異の考察」以降は、フェミニズム研究を区分する三番目の認識論的見地、すなわちポスト合理主義あるいはポストモダン・フェミニズムの見地からの検討部分である。これを行うにあたって彼女は、フェミニスト地理学者によって行われた研究を展望するのではなく、むしろ将来の方向を描くために地理学以外のフェミニズム研究者による議論に焦点をあてるという方法を選択している。その理由は、「こうした議論が地理学のそれときわめて類似した概念を多用しているため、その議論に対して地理学者が果たすであろう重要な貢献を評価する」ためである。この「きわめて類似した概念」とは、場所、立地、位置、縁辺、境界などの空間概念²⁾を指している。続けて、彼女は地理学者と他の学問分野のフェミニズム研究者によるこれらの用語の利用法の比較が、多くの地理学者が学会で問題提起しているにもかかわらず、あまり検討されていないことを指摘している（マクドウェル 2002/1993b：62）。

今日の時点でこの言及を読み返してみると、まず明らかなのは当時の「フェミニストではない」地理学者の多くが自らの学問の存立基盤のゆらぎについてはさほどの危機感をもってはいなかった

ということである。もし地理学者が上記の諸概念を自らの領域を画するものと見なしていたのであれば、地理学領域以外のフェミニスト研究者による空間概念の多用に対してより敏感に反応していたはずだからである。無視の理由としては、フェミニスト地理学者からの問題提起をなんであれ特殊かつ部分的なものともみならずというジェンダー・バイアスが強く作動していたことがあげられるだろう。ジリアン・ローズの言葉を借りるならば、「フェミニズムは、地理学の主流によって継続的に周縁に追いやられている。本来ならばフェミニズム理論とかかわるような地理学的議論においても、フェミニズムの重要性は全く認められておらず、それどころか地理学はフェミニズム理論を実質的に無視しつづけていた」(ローズ 2001/1993: 14)。ゆえに、フェミニズムにおける空間概念の多用現象は地理学者たちの視界の外にあり、それが地理学の存立基盤の揺らぎや、学界全体での議論の深化を引き起こすはずもなかったわけである。しかし、マクドウェルたちフェミニスト地理学者の遭遇した困難はこれにとどまらなかった。実は、この時期に「空間概念を多用」していたのはフェミニズム研究者だけではなくだったのである。社会、人文科学領域区分の脱境界化をともなった社会理論の「空間論的転回 spatial turn」³⁾がすでに起こっており、しかもその引き金をひいたのはデイヴィッド・ハーベイやエドワード・ソジャなど他ならぬ英語圏のポストモダン地理学者たち (Dear 1988; ハーヴェイ 1999/1989; ソジャ 2003/1989) だった。

しかし、フェミニスト地理学者たちはこのポストモダン地理学における議論のジェンダー視点の欠落についても批判しなければならなかったのである (Massey 1991=1994; McDowell 1992)。フェミニスト地理学者は、「伝統的なディシプリンの企画を堂々と(そして無批判に)再確認し、あるいは新しいアプローチをちっとも《地理学》ではないとして完全に拒絶しそれによって過去の

規範的な伝統を保護するという、そうした傾向」(ソジャ 2005/1996: 21) への批判と、それに対する批判であるはずのポストモダン地理学の「ポストモダニティの一部の主張に対してははっきりと共感を示してはいるものの、合理主義の伝統をあい変わらずよりどころとしている状況」(マクドウェル 2002/1993b: 63)、つまり、ポストモダン地理学といえども無条件では男性中心主義から免れえないことへの批判という重層的な課題を抱えざるをえなかったわけである。マクドウェルが、第2部の「(4) 地理学者、フェミニズム、モダニティおよびポストモダニティ」において「フェミニスト地理学の当面の目的」として、フェミニスト科学認識論研究者であり、フェミニスト・スタンドポイント論⁴⁾を主張してきたサンドラ・ハーディングとダナ・ハラウェイの「部分的」あるいは「状況化された知 situated knowledge」をめざす動きを取り上げて綿密な検討を加えているのはこのためである (マクドウェル 2002/1993b: 64)。

この検討の再吟味に入る前に (4) のマクドウェルの言及についてまず留意しておきたいことがある。それは (4) の冒頭で彼女が「フェミニスト地理学者の最初の反応はポストモダニティへの主張への懐疑」であったが、「しかし、ジェンダー関係の地域的な差異に関する研究に携わってきたフェミニスト地理学者の反応は、真実を求めるモダニスト的立場への後退ではなく、多様な女性のアイデンティティの構築における場所の重要性についての議論の幕開けであった」と言及していることである (マクドウェル 2002/1993b: 63)。

この時期すでにフェミニズムは実証主義フェミニズムを特徴づける合理主義のパラダイム、そして主体としての「女性」という反合理主義の概念をも拒否して、主体としての「女性」(または「男性」)を、「中心を持たず部分的で断片化されたアイデンティティ」という新しい概念」(マクドウェル 2002/1993b: 63) に置き換えていた。上述のように、1990年にジュディス・バトラーが『ジェ

ンダー・トラブル』において「ジェンダーだけではなくセックスやセクシュアリティまでもが社会的構築物であることを明確に分節化」（竹村 2003：180）したことによって、フェミニズム理論の主流はポストモダン理論、ポスト構造主義へと移行していった。しかし、バトラーのこの議論は「一方でフェミニズムの理論の展開に大きく寄与しながらも、他方でフェミニストからの根強い戸惑いや反発を受けており、その結果、理念と行動を橋渡しするはずの理論が両者を分断してしまう場面さえ見られている」という状況を引き起こした。竹村はこのようなバトラーの議論への批判として、バトラーはフーコー的「権力」分析の絶対視だとしたトリル・モイ、主体への懐疑が、対抗的アイデンティティの形成を無効にすると警告したセイラ・ベンハビブやナンシー・フレイザー、女が置かれている現実を蔑するものとするマーサ・ヌスバウム、バーバラ・ドーデンなどを挙げている（竹村 2003：108-109）。また、ジェイン・ピルチャーとイメルダ・ウィハランは、「身体」という問題に関連してバトラーに典型的に示されているような「強硬な」社会構築主義アプローチが物質的な実体としての身体を消去してしまう危険性には批判があったし、いまなお実体と言説上の身体との緊張関係はジェンダー・スタディーズにおける論争の主要課題だとも述べている（ピルチャー&ウィハラン 2009/2004：17）。バトラー自身も「主体としての女性（または男性）を、中心を持たず部分的で断片化されたアイデンティティという新しい概念に置き換える」という主張が、フェミニズムの脱政治化を招くのではないかと危惧されることをあらかじめ予見していたのであろう。『ジェンダー・トラブル』の結論は、この危惧に対するきわめて明解な回答になっている。バトラーは行為と反復による主体の言説組成過程を簡明な言葉で要約しながら「フェミニズムの政治が『女』というカテゴリーのなかの『主体』という概念を持たずにやっつけていけるかどうか」と

いう問題について、『わたしたち』というカテゴリーの根本に不安定さがあるからこそ、フェミニズムの政治理論を基盤づけている制約をもう一度考え直し、ジェンダーや身体だけでなく、政治そのものについても今とは違う配置を行うことができる」、「アイデンティティの脱構築は政治の脱構築ではない。それはアイデンティティが分節化される条件を政治的なものとみなすということである」と書いている（バトラー 1999/1990：250-260）。また1997年の著作『触発する言葉』では、アメリカ合衆国の人種差別告発、ポルノ規制、米軍内の同性愛カミングアウト問題を取り上げて社会変革の可能性としての「言語の限界地点から引き出されてくる行為体」についてきわめてラディカルな政治論を展開した（バトラー 2004/1997：64）。バトラー本人をも含めてこのようなフェミニズムの脱政治化への危惧は、フェミニズムが社会変革を目指す闘争思想として社会運動のなかで生まれ、つねに「正しい定義」への収斂を拒否する動態としてつまり脱構築そのものとして存在してきたからこそであると言えるのではないだろうか。ポストモダニティの女性間の差異の主張は受け入れるが、ジェンダーの差異の優位性は手放さないというフェミニスト地理学者の「ポストモダニティへの最初の反応」としての「懐疑」は、彼女たちが合理主義的レベルのフェミニズム時代から苦勞して獲得してきたものを無為にするかもしれないという危惧にあったわけである。ソジャはこの事情を「フェミニスト地理学者（フェミニスト以外の研究者と同様に）後ずさりしたように見受けられる」がそれは「他のモダニズム的ディシプリンで示されたように、近代《地理学》が本質的に、そしておそらくは拭き切れないほどに男性支配主義的であることが明らかになってきたのだ。しかし、同時に、発展してきた新しいポストモダン地理学は、白人男性が他の一多くはフランス人の一白人男性支配を継続するだけに見えたのである」と説明している（ソジャ 2005/1996：

153). ちなみにソジャのこの状況説明は、反省の弁でもある。すでに述べたようにマクドウェルらの批判を受けたソジャは、1996年の著作『第三空間』では、第三章：差異がつくる空間の探求、第四章：《第三空間》の開放性を強化する、においてベル・フックスらの空間論的フェミニスト言説とポストコロニアル言説を取り上げ、第四章では上記のフェミニスト地理学者からの批判の経過を自省的に詳しく語ったわけである(ソジャ 2005/1996: 110-186)。このような事実からみても、当時の地理学界の男性中心主義がいかに強固であったか、それゆえに当時のフェミニスト地理学者がナンシー・ハートソックらのフェミニスト・スタンドポイント理論に依って「ジェンダーという差異の優位性」にこだわらざるをえなかった事情がよく分かる。しかし、上述したように、このような危惧はフェミニスト地理学者だけのものではなかったのである。したがって、マクドウェルのこの言及において注目すべき点は、なぜフェミニスト地理学者がいち早く「懐疑」を乗り越えたのか、モダニスト的立場へと後退せず空間・場所の新たな議論構築に向かって行けたかにある。それは、彼女たちが幸運にも(!)地理学者であるがゆえにジェンダー関係を「地域間の差異」、「場所」、すなわち空間性において考察してきたからであると言えるのではないだろうか。フェミニスト地理学者たちは、「地理学の存在理由の核心が場所間の差異である」がゆえに「女性間の差異」や「場所間のジェンダー関係の構造における差異」、「女性間の差異だけでなく人種やエスニシティ、性的指向、年齢、地域・国民的アイデンティティといった様々な差異が提起する困難な問題に注目しないではいられなかった」(マクドウェル 2002/1993b: 60-61)。彼女たちは、「ポストモダンの脱構築というプロジェクトに共感して」(マクドウェル 2002/1993b: 64) 個別的な差異を生み出す差異としてのジェンダーを「空間」、「場所」の問題として議論する準備ができていたのであ

る。そして、グローバル化のもとで「近代を支配してきた<空間>の自明性の喪失、空間概念の決定的な揺らぎが空間概念の浮上を促し、空間概念が社会理論にとって決定的な重要性を帯びるようになった」(吉見 2003: 132-133) 状況において、フェミニスト地理学者たちが幕開けした「多様な女性のアイデンティティの構築における場所の重要性の議論」こそは、ポストモダン・フェミニズムにおける主要課題でもあったのである。言い換えれば、グローバル資本主義に包摂された状況で「フェミニスト」であろうとすることは、空間的に発現するさまざまな抑圧への抵抗戦略を空間論的に構築していくということだったのである。先に述べた「フェミニズム研究者の議論に地理学の類似概念が多用される」、「現代のフェミニストの著作において空間に言及することが目立つ」(マクドウェル 2002/1993b: 67) 理由はここにあったわけである。

マクドウェルは、第2部「(5) フェミニスト幾何学」ではハラウェイの「ローカルな知をグローバルなスケールから個人的なスケールにいたる社会的諸力によって多様に形成された一連の領域の中の結節点とみなす実体化の概念」と、マッシーの「境界がなく変わりやすい関係のネットワークの中で様々な位置をもった結節点としての場所概念」の類似を指摘し、「(6) 場所に関するフェミニスト的/ポスト合理主義的概念に向けて」ではチャンドラ・モハンティのコミュニティを「関係性」としてとらえる議論を、マッシーの「場所感覚の深化」の議論と対比し、また「(7) 場所における主体」では空間と場所の社会的構築と主体を生み出す役割についてのフェミニストの議論とピーター・ジャクソンをはじめとする地理学者たちのジェンダー視点からの研究を対比している(マクドウェル 2002/1993b: 66-70)。彼女はこれによってフェミニズムと地理学研究課題の相互性、フェミニズムの空間についての議論に対する「地理学者が果たすであろう重要な貢献」の方向

性を示したのである。

さて、マクドウェルが取り上げている「部分的」あるいは「状況化された知」とは、1980年代以降にアメリカ合衆国のフェミニストたちのなかで顕在化してきた女性間の位置、場所についての差異の議論、ポスト構造主義フェミニズムとポストコロニアリズムの交差の議論から形成された概念である。ハーディングによれば「状況化された知」とは「すべての知識は歴史的に固有な形で—たとえば男性中心主義、ヨーロッパ中心主義的な文化プロジェクトの一部として、あるいはフェミニストや反人種差別的なプロジェクトの一部として—構成されているとみなし、特定の社会的あるいは歴史的な位置をまったくもたないという立場—それはダナ・ハラウェイが近代科学哲学の『神のトリック』として特徴づけたものである—から発言できるという可能性を否定する」というスタンス・ポイント・アプローチであり、このような研究実践は「社会を支配している秩序に関して女性の生活から生じた疑問、つまり一般的な概念枠組みから問えなかった疑問に答えるもの」（ハーディング 2009/2006：131）である。また、ハラウェイは、「欧州系アメリカ人で、プロフェッショナルで、常勤で、フェミニズムの立場に立ち、四十代の女性であった自分がカリフォルニア大学とハワイ大学で女性学を教える」という自らの経験を対象化し、その「女性の経験」を言説として生産する装置の一部として検証する試みのなかで、「状況化された知」を、「人種やセックスという刻印されたカテゴリー—男性中心主義的で人種主義的な植民地支配の過程で旺盛に生産されてきたカテゴリー—の内部に書き込まれてきた人々が意識をマッピングするうえで、格段の力を発揮するツール」であり、「常に刻印された知であって男性中心主義的な資本主義や植民地主義の歴史の過程で、世界という不均質な塊を球体化し、グローバルな存在としてきた偉大な地図の数々を再度刻印し、再度方向づける」ものであると述べ、ひと

りの女性の経験あるいは意識が、ポストコロニアリズム言説のローカル／グローバル、フェミニズム言説のパーソナル／ポリティカルという対立項の振り分けと交差の反復の幾何学を描きながら構築されていく過程を説明している（ハラウェイ 2000/1991：213-217）。そして「フェミニズムならではのこのような『部分性』あるいは『状況化された知』への希求が、種々の身体と意味が可能性としてうごめく場に位置するこの結節点において、さまざまな対話とコードを始動させる。この地点こそが科学、サイエンス・ファンタジー、サイエンス・フィクションがフェミニズムにおける客観性の問題において収斂する場なのだ」と結論している（ハラウェイ 2000/1991：387）。つまりハラウェイは『『実体をもつローカルな知』の客観性は、『部分的』であるがゆえに客観的なものであって、それは『どこにもない場所 nowhere』という中心を持たない相対主義や『どこにもある場所 everywhere』という啓蒙主義からの観点ではなく『どこかある場所 somewhere』からの観点からの客観性である」と主張するのである（マクドウェル 2002/1993b：66）。マクドウェルはこのような立場は「構築主義と同時に現実の物質世界の存在を認めるフェミニズムであり、差異の理論的分析と場所間において繰り広げられる（象徴体系、一連の社会関係、個人のアイデンティティとしての）ジェンダー、セクシュアリティ、世帯、家族構造、家庭と職場の関係のポリティカルエコノミーとの相互関係の理解を促し、女性間の差異の理論的理解に基づくフェミニズム」であると評価し、残された問題はこの種の主張を地理学がどの程度受け入れるのか、無関心のまま研究を続けるのかだと述べている（マクドウェル 2002/1993b：71）。

以上の検討から言えることは、1993年のマクドウェルの「問い」は、「空間論的転回」のさなかにあって「多様な女性のアイデンティティ構築における場所の重要性」を「状況化された知」の

構築として捉えることがフェミニズム研究とフェミニスト地理学に共通した主要課題へと収斂していく「状況」において発せられたということである。15年の時を経て両者はそれぞれこの課題にどのように答えてきたのだろうか。次章ではまずフェミニズム研究の「答え」を、1990年代から加速的に進展したグローバリゼーションについてのフェミニスト分析のなかに見ていこう。

III グローバリゼーションのフェミニスト分析

カレン・カプランはすでに1980年代後期からカルチュラル・スタディーズ、批評理論領域において空間的メタファーに関する問題を多角的に議論してきており、1994年のインダパル・グレワルとの共編著書『散在するヘゲモニー—ポストモダニティとトランスナショナル・フェミニズム実践』では、領域化／脱領域化の議論から、グローバル化する世界状況においていま必要なのはトランスナショナルなフェミニストの連携であるとしてトランスナショナル・フェミニズム批評実践を主張したフェミニストである (Kaplan 1987, 1990, 1998, 2003/1996; Kaplan&Grewal 1994)。彼女は1996年の著作『移動の時代—旅からディアスポラへ』の4章ポストモダン地理学—居場所 location に関するフェミニズムの政治学、において、「地理学と、合理性やヒューマニズムに揺さぶりをかけたポスト構造主義と主体性を問題にしたフェミニズム理論が交わしている『会話』は、産業やテクノロジーの文化の編成に生じつつある根底からの変化を表している」(カプラン 2003/1996: 259)、「居場所 location や位置 position をめぐる近年のフェミニズム言説は、ポストモダンな批判的地理学につなげることができる」(カプラン 2003/1996: 316)として、ジェームズ・ダンカン、デヴィッド・レイ、ニール・スミス、シンディ・カツツらの議論を参照しながらフェミニズム批評に見られる空間的メタファーの問題点

を検証し (カプラン 2003/1996: 256-259)、ハーヴェイ、ソジャらの空間の生産の議論、そしてそれに対する「モダニティと空間と社会関係相互の関わりにとって中心的な議論がそっくり抜けている」と言うマッシーのジェンダー視点からの批判を取り上げて、「居場所 location」の政治性やアイデンティティ形成についてのフェミニスト空間言説が見かけだけポストモダンな批評活動として現われてくることの危険性を指摘している。彼女は、「ジェンダーをはじめとして、その他の多様な様相をめぐる諸問題に取り組むために必要とされるのはもっと広い、もっと複雑な唯物論である。それこそが、ヘゲモニーによって形成された体系の権力と限界を問えるからだ」(カプラン 2003/1996: 263-273)、そのために中心／周辺の構造化モデルおよびグローバル／ローカルの二元論の脱構築、居場所 location と移動 displacement にかかわるすべての比喩、言及の再検討、現代のジェンダー、エスニシティ、国家あるいは地域的アイデンティティ、文化の場所を生み出すトランスナショナルな権力配置批判が重要であると主張した (Kaplan 1998: 60-65)。

このようなカプランの主張を、フェミニスト政治経済学領域で展開しているのがサスキア・サッセン、足立真理子の議論である。足立は、サスキア・サッセンの『グローバル空間の政治経済学』(サッセン 2004/1998)を敷衍しながら、現代のグローバリゼーションに対するフェミニスト分析の成果を、次の三局面から議論している (足立 1999, 2003a, 2003b, 2005a, 2005b, 2005c, 2008)。以下、そこで使用されている空間諸概念に留意しながらこの議論を見ていこう。まず、第一局面の分析は、1960年代からの古典的国際分業 (先進資本主義国=工業生産/途上国=第一次産品・原料・食料生産)のもとにおける生存維持経済への商品経済の浸透過程と、そこにおける女性の社会経済的位置に関するものである。第二局面は、1980年代からの古典的国際分業に代位する新国際分業

(New International Division of Labor : NIDL) が進展したこと、すなわち資本蓄積の空間的・時間的前提条件そのものが変化し、そのもっともドラステックな現象形態として「労働力の女性化」の進展が世界規模で進行したことに関わる分析である。クラウディア・フォン・ヴェールホフやマリア・ミースらドイツのマルクス主義フェミニスト⁵⁾たちはNIDLの進展過程における実証研究から、この「労働力の女性化」の進展は、資本主義の外延的拡大における自由な賃労働 (free wage labor) ではなく、むしろそれ以外への多様な労働力の一形態として性別・エスニシティ・人種・国籍において制度的制約を受ける「不自由な賃労働 un-free wage labor」および賃金による報酬を取らない就労形態でのインフォーマル・セクターから生存維持経済にいたるまでの様々な就労形態という意味での「非賃金労働 non-wage labor」の増大過程であり、ここに充当される労働力は新たな国際分業によって再配置されるジェンダー・ヒラルキーにそって再配置され、このことが賃労働の風化それ自身をもたらすのだと主張した。そしてNIDLの展開過程が現実のものとして機能するためには、ディアヌ・エルソンとルース・ピアソンがいみじくも「器用な指が安い労働者をうみだすのだろうか? : 第三世界の輸出製造業における女性雇用の分析」(エルソン&ピアソン 2003/1981) において指摘したように、多国籍企業による途上国・周辺地域の安価な女性労働力の「再発見」と先進地域の既婚女性を「主婦」として「家計補助並み」水準で雇用して、消費財貨幣購買力を高める一方で、高騰する労働力再生産コストを世帯領域に負担させる先進国・中心部における既婚女性の非正規雇用労働力の「再発見」が統合されることが必要であったことを明らかにしたのである。つまり新国際分業によって結合された資本主義経済の入り口(途上国)と出口(先進国)の双方に配置される女性労働力の統合が必要であることを解明したのである。NIDLの進展は世界

の諸地域において伝統的経済社会構造の変質とグローバル化そのものによる文化的変容をもたらした。それは一方ではNIDLの前提条件をなす膨大な労働力プールをさらに累積的に生み出し、他方では、中心部における多国籍企業の中核指令機能の集中するグローバル・シティ (global city) における多様なサービス労働の需要の増大が、周辺・半周辺諸地域から中心部に向けた膨大な女性労働力移動、すなわち「移動の女性化」を喚起する。これが1990年代からのグローバル化の最新局面、ポストNIDL、つまり再生産領域のグローバル化が展開していく基盤となったのである。

したがって、1990年代からのフェミニスト分析の第三局面は、再生産領域=再生産・人間労働力の再生産に関わる領域、人の誕生から死に至る再生産の総過程を含む領域のグローバル化、具体的にはケア労働を核とする再生産労働の国際分業という現象としてのなかで、ジェンダーがどのように再定義され、再配置されるのかを照射することにある。

サッセンは、グローバル化のもとで開いている国境を越えるさまざまな回路は、すべて「不利な状態に置かれた人々にもたれかかって発展した利潤形成もしくは歳入回路」であり、それは「生き残りの女性化 feminization of survival」現象 (Sassen

2003 : 59) といえる現象であり、とりわけ移民女性が中心的役割を演じる回路のなかに作動しているジェンダーをめぐる力学を見出すこと、そして、このような回路の中核をなす場 (place) としてのグローバル・シティ (global city) の空間分析が重要であると指摘している (サッセン 2004/1998 : 1-9 ; Sassen 2002 : 131-143)。金融・情報コングロマリットの集中するグローバル・シティでは、対企業サービス職種 (金融取引関連業務、法務・会計業務、IT関連業務など) と、それらの富裕化した賃金労働者の個人所得の分配に依存する対個人サービス職種への分極化が生じ、

賃金労働内部における所得源泉の質的差異が明確化してくる。つまり金融・情報コングロマリットの対企業サービスによって、そこに発生する超過利潤の一部を「賃金」や株式・有価証券保有など「資本所有形態」で保有する富裕化した賃金労働者層と、その個人所得からの分配に生活を委ねざるをえない対個人サービス労働者層が分節化するのである。足立は、このような対個人サービス労働者の就労形態は、しばしば「雇用」としても承認されない労働市場の周辺性という枠組みの外にあるものであることが多様な実証研究から明らかになってきており、それはサッセンが「雇用中心型貧困 employment-centered poverty」と呼ぶ複合就労であると指摘している(足立 2005b: 105-114)。対個人サービス労働者としてケア労働を担うのは主として移動女性である。彼女たちは富裕労働者層に雇用され、同時に故国に残した世帯の再生産労働を、移動しない、あるいはその可能性を持たない女性に委ねる。つまり、自由な賃金労働—不自由な賃労働—非賃金労働の連鎖が、中心部エリート女性—周辺からの移動女性—移動しないあるいはその可能性を持たない送り出し国女性という再生産労働の分業関係の国際的連鎖として空間的に再構築されるとき、移動女性の身体はその「蝶つがい」の役割を果たすわけである。グローバル・シティにおいて彼女たちは従来の資本—賃労働関係では把握できない、これまでは資本主義の周辺的あるいは滞留的・潜在的とみなされてきた社会層として存在することになり、グローバル資本主義中心部の「内なる外部」を形成する(足立 2005b: 108)⁶⁾。サッセンは、グローバル・シティをグローバル資本と移民労働がともに国家をこえた対抗的主体を構築し対峙する場(place)、滞留化、潜在化されていた人々が「重要な主体として登場する」(サッセン 2004/1998: 39) 具体的な場であって、人種・エスニシティ・ジェンダーの差異が交差する境界閥(borderland)として分析対象とする。その理由は、「都市に焦点を合わせる」

と「経済と労働文化が多様なものである」、「大都市における多元的文化が国際金融と同様にグローバル化の一部であること」が「地球規模で地理学的に分析できる」(サッセン 2004/1998: 36)からである。稲葉は、サッセンの「場所論」は「『中心』として表象される経済と、『他者』として表象される文化の間の非連続性を導入して、経済の領域を再構成する試み」、「経済分析に『場所』を再導入する試み」であり「都市のなかに構築されているグローバル経済の構成要素である空間的、経済的、文化的要素をすべて包含するような経済的グローバル化についての新しい語りをどのように構築できるかという問い」であると指摘している(稲葉 2003: 182)。地理学においてもこのような接合の議論はすでになされていた(マクドウェル 2001/2000: 142-149)のだが、サッセンのこの問いを受けて、グローバル・シティの移動女性の状況をグローバリゼーションの「従僕 servant」の現出という概念で捉え、送り出し国フィリピン、受け入れ国のアメリカ合衆国とイタリアで行った移住フィリピン家事労働者の主体構築についての綿密な聞き取り調査から、再生産労働の国際分業論を空間論的に展開したのは、フェミニスト社会学者のラセル・パレーニャスであった(Parreñas 2002/2000, 2001, 2005, 2007, 2008)。彼女が使用する語「サーバント servant」とは「家内使用人」のことでなく、グローバリゼーションそのものが、そこに付随する「従僕」を生み出すということの意味している。パレーニャスは、エブリン・グレンによって1922年に提起された「再生産労働の人種間分業」概念を引いて、「長きにわたって再生産労働は特権階級の女性によって購入される商品だった」と指摘し、再生産労働がすべての女性にとって等しく世帯に埋め込まれた無償労働としてのみあったわけではないことにまず注意を喚起する。そして今日では市場経済のグローバル化が再生産労働のポリティクスを国際的なレベルにまで拡張したので、フィリピン女性の

国際移動と家事労働部門への参入という再生産労働の国際分業が形成されたのだとして、これを「ケア労働 caretaking の国際移転」と名づけ、「女性の地位に関する重要だが異なる」二つの言説—エブリン・グレンによって 1922 年に提起された「再生産労働の人種間分業」論と、サッセンの「国際分業論」—を接合して、トランスナショナルな再生産分業論を展開していく。

「フィリピン人移動者が労働移動へと駆り立てられる理由として等しく挙げるのは、グローバルな経済再編過程における経済的な『転置 displacement』だが、その回答の『経済的な』移住労働の意味には明確なジェンダー差がある」(パレーニャス 2002/2000:160) と、パレーニャスは指摘する。フィリピン人女性は家父長制的核家族のジェンダー・イデオロギーと対峙しなければならない。海外移住は家庭内での再生産労働負担から女性を解放するが、世帯維持の稼ぎ手役割を担う家族維持戦略としての移住によって家族内の伝統なジェンダー分業は再構成されることになる。労働市場においても「ケアの担い手としての女性」というイデオロギーが、女性の生産労働活動を束縛している。女性はジェンダー階層化された市場経済に立ち向かわなければならないので、海外移動がより促進されるわけである。また、女性の単身海外移住は、しばしば家庭内暴力や、夫婦間の不和、不実があっても離婚をみとめないカトリシズムというジェンダー規定からの逃避手段となる。ゆえに、彼女たちの「転置 displacement」は、短絡的にグローバル資本主義の帰結と見なすことはできない。フィリピン人女性の移住労働はジェンダーによる抑圧・支配をめぐる「交渉」過程として把握されなければならないのである。パレーニャスは、「送り出し国フィリピン内部で不連続なシステムとして機能している家父長制が女性の移住労働のもう一つの要因であり、このシステムは受け入れ諸国におけるジェンダー不平等のシステムと同様に、女性の移動に関するマクロ構造的

決定要因に含められる必要がある」と主張している(パレーニャス 2002/2000:164)。こうして故国を飛び出した女性たちは受け入れ国において故国のそれと類似したジェンダー・イデオロギーをもつ社会と対峙することになるが、そこでは人種・階級・シチズンシップの不平等がそれに複合しているので彼女たちの立場はより困難なものとなる(Parreñas 2005:1-17)。「自分の故国/家庭 home での家父長制の制約から逃避しても別な家庭 home でのジェンダー不平等に行き着く」(パレーニャス 2007:144)というわけである。グローバル・シティで彼女たちが就労機会を得られるのは、富裕化した賃金労働者層の家庭 home 内にジェンダー不平等が維持されているからである。先進国の労働市場への女性の参加率が上昇しても、女性たちは世帯での再生産労働の責任から完全に免れたわけではない。しかし、高収入のダブルインカムで富裕化した女性たちには他の女性のサービスを買えるフレキシビリティを与えられるのである。「賃労働の女性化」が進んだグローバル資本主義は、特定のジェンダー不平等システム間の連関を作り出す。そして女性の国際移動が、送り出し国と受け入れ国双方におけるジェンダー不平等のシステムをグローバル資本主義に結びつけるのである。こうしたすべてのプロセスは、再生産労働の国際分業形成において生じている。ケア労働の国際移転の下で、フィリピンからの女性の労働移動はグローバル資本主義の過程に埋め込まれているのである。そしてジェンダー制約は、彼女たちの労働移動の中心的な要因となる。つまり、女性の労働移動の過程にはフィリピンにおけるジェンダー役割の逃避、先進国で彼女たちを雇用する女性にとってのジェンダー制約の緩和、そしてフィリピンに残っている女性たちのジェンダー役割の押し付けが含まれているのである。パレーニャスは、「ケア労働の国際移転は、グローバルな労働市場における女性間の社会・政治・経済関係に関わっている。この分業は、階級・ジェンダー、

そしてネーションを基盤とするシチズンシップに基づく不平等の構造関係であると規定する(パレーニャス 2002/2000:167). このようなケア労働の国際移転は, 受け入れ国の生産活動を増大させて発展を支えるが, フィリピンの経済発展は限定されて, 彼女たちの低賃金によってもたらされる外貨に依存している. 先進国の雇用主—フィリピン女性移動家事労働者—彼女がフィリピンで雇用している家事労働者の間のヒエラルキカルで相互依存的な関係は, 中心—周辺の不平等発展, 階級格差, ジェンダー・イデオロギーによる再生産労働の女性への押し付けから構成されているのである. この連関を, パレーニャスは移動女性と子どもとの関係において具体的に説明する(パレーニャス 2002/2000:167, 2008:155-171). フィリピン家事労働者は低賃金あるいは法的制約のために受け入れ国で自分の家族を維持するという高いコストを払うことができない場合が多い. そこで自分は雇用主の子どもの世話をしながら, 自分の子どもの世話は故国の家族・親族女性か雇用した家事労働者に任せざるをえない. 先進国とフィリピンとの経済格差がこれを可能にしているのである. パレーニャスは, ケア労働の国際移転のもとでは「海外で働く家事労働者の家族によって雇われている家事労働者が, 本当のサルタン女性なのである」(パレーニャス 2002/2000:170)と指摘する. 移住フィリピン女性家事労働者は, 先進国のより特権的な女性労働者たちの再生産労働を遂行しながら, 自分たちの自身の再生産の労働をフィリピン国内のより貧しい女性に託す. 女性間で人種・エスニシティ, 階級的差異が作動することによってこれが可能になり, 家父長制核家族世帯と家族イデオロギーは温存されていく. ここで移住フィリピン女性家事労働者の身体空間は「蝶つがい」となる. なぜなら彼女たちが「中間に位置する being in the middle」ことで, トランス・ナショナルな世帯構造が維持され, これによって, 「ばらばらの国民国家が結び

つく」(パレーニャス 2002/2000:171)からである. しかし, パレーニャスはこの「中間」は水平に位置しているのではないし, つねに「位置流動 dislocation」して多様に現象するものなのだと言う(パレーニャス 2002/2000:172). 受け入れ国では経済的に「望まれる労働者 desired worker」であると同時にシチズンシップを「拒否される rejected citizen」(パレーニャス 2002/2000:171)という彼女たちの「位置流動 dislocation」はグローバル化のマクロ過程の「国民経済の脱国家化 denationalization of economies」と「政治の再国家化 renationalization of politics」(サッセン 1999/1996:129)に状況づけられている. ゆえに, 「位置流動 dislocation」を検討することによって, 送り出し国フィリピンと受け入れ国である先進諸国のそれぞれ多様なローカルな地域における移住フィリピン女性家事労働者の生活の共通性が析出できる. 「位置流動 dislocation」概念は, 「彼女たちの生活へのグローバルなプロセスの影響を, 共通の基盤としてナショナリティを横断し, 地理的にも大陸を横断するものと相互同定しうる」のである(パレーニャス 2002/2000:173). フィリピン, アメリカ合衆国, イタリアでのフィールド調査において見出される「位置流動 dislocation」は, きわめて多様である. フィリピンでは専門職のミドルクラスであった女性が移住先では家事労働職に就くという「矛盾した階級移動 contradictory class mobility」, トランスナショナルな世帯形成による家族分散の苦痛, そしてフィリピンに残した家族との紐帯が送金や贈り物など商品基盤の関係性に転化していくこと, それとは逆に雇用主家庭 home では, 再生産労働の商品化という現実にかかわらず疑似家族的な親密性が生成されること, 受け入れ国の社会における限定的なシチズンシップなどがそれにあたる. 2001年の著作『グローバル化の従僕—女性, 移動, 家事労働』の第7章では「居場所のなさ nonbelonging という位置流動 dislocation」とい

う表題でローマとロサンジェルス・フィリピン人コミュニティのあり様が比較分析され、前者においては社会的、国家政策的に定住や統合が厳しく制限され、後者においてはそれが保障されているにもかかわらず、ともにコミュニティのアノミーから「居場所のなさ nonbelonging」という場所感覚が共通して生成されていくことが明らかにされている (Parreñas 2001: 197-242)。シチズンシップが十分に保障されず、就労先が拡散しており、またしばしばあからさまな人種差別にさらされるローマの移住フィリピン女性家事労働者たちのコミュニティは、教会や個人のフラットあるいはバスの停留所や鉄道駅、道路からは死角になっている橋の下、市域の縁辺などの空間を「孤立した溜まり場 pocket of gathering」として場所化することによって形成される。このような不連続で不安定なコミュニティ空間は、彼女たちにイタリアの公共空間から排除されているという疎外感を再確認させ、「居場所のなさ nonbelonging」という場所感覚を生成する (Parreñas 2001: 202-210)。その結果として、彼女たちはコミュニティ内で相互扶助的な連帯活動をしながらも、他方では帰国実現のための資金づくりとしてフィリピン食品販売、融資、所有フラットのまた貸しやベッド提供などのインフォーマルな小規模ビジネス活動を展開して金儲けを図る。これによってコミュニティ内の人間関係に商品関係が介入してアノミーが生じるのである。それは「居場所のなさ nonbelonging」という場所感覚をさらに増幅する。

ロサンジェルスでは、ナショナル・レベルのさまざまな領域のフィリピン人組織の下部組織として多数のローカル・コミュニティが存在する。フィリピン人エスニック集団内部には 1965 年の移民法改正で移住して主流社会に参入を果たした高学歴・専門職フィリピン人を上層として、そこそこではあっても一応安定した地位を得た中間層、そして下層の移住女性家事労働者という階層分化が著しい。ローカル・コミュニティは中間

層の活動の場となっているので移住女性フィリピン家事労働者はアウトサイダーと見なされる。彼女たちはこれを逆手にとってメンバーシップの一時性を強調し、「成功した移民」競争には参入しないことで中間層との差異化を図ろうとする。このような「居場所のなさ nonbelonging」への抵抗としての防御的態度によってコミュニティ内部にアノミーが生じ、それがさらなる「居場所のなさ nonbelonging」という場所感覚の再生産につながるのである (Parreñas 2001: 227-240)。このような状況においてローマとロサンジェルスの移住女性フィリピン家事労働者はともにフィリピンを「帰還すべき故郷 home」として構築する。それは「位置流動 dislocation」において失われたものを「回復する／取り戻す recuperate」する、つまり限定されたシチズンシップへの抵抗だが、同時に受け入れ国社会での正当なメンバーシップの獲得を放棄して受け入れ国家の「ゲスト」言説へと回収されることである。また、それは送金確保のためにフィリピン国家が構築する「故国 home」言説に回収されることをも意味する⁷⁾。

以上、パレーニャスのフェミニスト分析の特徴は、移住女性フィリピン家事労働者のローカルな日常実践における行為主体構築過程、つまり彼女たちが「場所における居心地の悪さ」のなかでどのように主体位置 (subject-position) を変化させていくかを場所化と場所感覚の生成側面から子細に見ていくことによって、国際労働移動の社会化過程内部に「位置流動 dislocation」が内包されることを析出し、それがグローバル資本主義の再生産領域の再編と蓄積システムの空間的発現であることを明らかにしたことにあるといえるだろう⁸⁾。

伊藤と足立は、商品、資本、情報、企業サービスのグローバルな展開過程において「常にその存在要件として再読され、再発見される「再生産領域」のグローバルな展開こそが現代を読み解く鍵であるとして、アジアにおける「国際移動の女性

化」のなかで階級編成と密接に絡んだジェンダー再配置が、一方では国境を超えて、他方では国家の枠組みを再形成し、さまざまなレベルでの秩序化を促す動きを、「方法論的なナショナリズム」の罠に陥ることなく捉えるために「連鎖するジェンダー」という分析概念を提唱している(伊藤・足立 2008:10)。ミリヤナ・モロクワシチは、社会主義体制崩壊の東ヨーロッパからの移動研究においてトランスナショナリズムのジェンダー分析は従来の研究の「ナショナル」なものへの支配的な関心を克服できるだろうと指摘している(モロクワシチ 2005/2004:155)。アレナ・ハイトリンガーは、世界各地からの移動者であるフェミニスト研究者の「移民 *émigre* の経験」についての論集『エミグレ・フェミニズム』を出したのは「異なる地理的・階級的位置が知識の産出と受容に与える衝撃力を名づける」ためであるが、それはローカル・地域・グローバルにフェミニスト思想と実践を発展させるのに寄与するはずだと主張している(ハイトリンガー 2003/1999:93-101)。

以上、カプランが言うところのトランスナショナル・フェミニズムとは、グローバリゼーションの最新局面を、中心/周辺という対立ではなく中心一周辺の流動・連鎖として読み解こうとする空間・移動論的フェミニスト分析であると言えるだろう⁹⁾。

IV フェミニスト地理学の進展

冒頭で述べたように、この15年間でフェミニスト地理学はアカデミックな体制へと参入し、多様な研究が蓄積されてきた。しかし、本章の目的はそのレビューにあるのではない。本章では「多様な女性のアイデンティティ構築における場所の重要性」を「状況化された知」の構築として捉えるというフェミニズムの課題に、地理学者という位置 position からマクドウェルらフェミニスト地理学者がどのように答えてきたのかを明らかにす

るために、彼女たちの空間的諸概念と空間的メタファーの有効性に係る議論を中心に見ていく。

1996年にナンシー・ダンカンが『身体空間—ジェンダーとセクシュアリティの“脱”安定化の地理学』と題したフェミニスト地理学論集を出版した。序章において彼女は、現在フェミニストは、場所と空間の物質的なコンテクストに身体化され、ジェンダー化されて埋め込まれた知の思想に基づく新たな認識論の探求にあたっているが、それは普遍主義的(と言うものの今のところは男性中心主義でしばしばヨーロッパ中心主義なのだ)言説に修正や付加を要求するのではなく戦略的な変革プロジェクトであるとして、本書の論者たちは、空間、場所、ローカルとグローバル、抵抗の現場、地図学、フィールド・ワーク、越境、公/私空間の分離などの地理学概念の再考や再一政治化をとおしてこのプロジェクトの助けになることを望んでいる、そういうわけで、本書は「身体空間」というタイトルの言葉が示すように、文脈され、状況化された社会関係分析に有効な場所、空間、その他の地理学概念を強調することによってジェンダーとセクシュアリティ(双方とも身体的でかつ論議を呼ぶ語だが)をアカデミックな事象として公正に位置付けることを目的としているのだと述べている(Duncan 1996:1)。ゆえに、この論集は「フェミニズム研究者による空間概念の多用」についてのフェミニスト地理学者からの応答のひとつと見なすことができるだろう。

イギリス、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアからの16名の論文執筆者のうちマクドウェル、マッシー、ローズをはじめ14名が地理学者である。論集は三部構成になっている。興味深いことは、ダンカンによる序章が(Re)placings, 第1部は(Re)readings, 第2部は(Re)negotiations, 第3部は(Re)searchingsと、すべて「再(re)」で始まる言葉が選択されていること、また、論文のタイトルにもそれは共通していることである。例えば第1部3章英文学者のカトリー

ン・キルビー論文の「主観性の再：地図化—地図学的視点と政治的制限 Re:Mapping subjectivity-Cartographic vision and limits of politics」, 5章のハイジ・ナッシュとカトリーン・コバヤシの「再—身体化の視点 Re-Corporealizing vision」, 8章のダンカン論文「公および私空間における(再)交渉されるジェンダーとセクシュアリティ Renegotiating gender and sexuality in public and private space」, 9章のジル・ヴァレンタイン論文の「(再)交渉される“異性愛的な路上—レスビアン空間の生産”(Re)negotiating the “heterosexual street”—Lesbian productions of space」, 10章のウエイン・ミスリック論文「(再)交渉される場所の社会的/性的アイデンティティ—安全な避難所あるいは抵抗の場としてのゲイコミュニティ? (Re)negotiating the social/ sexual identities of places—Gay communities as safe havens or sites of resistance?」がそれである。「再 re」という接頭辞の選択の意図はどこにあるのだろうか。ダンカンは、今日の多くのフェミニストは、先の世代のように自らが大文字の他者に成りかわること、すなわち男性中心主義で支配されている「公」への到達をゴールとはみなしていない、女性の排除だけを規範からの逸脱の特殊な事例として析出するのではなく、それが他の多くの排除されてきた集団と同じ排除のひとつであることを開かれた異種混濁的な地平で析出するように社会科学の認識論の枠組み自体を作りかえていくことが目標なのだ、それゆえフェミニストが非文脈され、脱身体化され、ジェンダー欠落的な「客観」な知に換えて状況化された知の概念を創出しようとする過程で重要なことは、ハートソック、ハーディング、ハーヴェイらが言うように、それが被抑圧の代弁であってはならないことに留意することだと主張している。次いで、彼女は本論集の目的のひとつは、空間と場所の問題を取り扱うことをとおして、社会科学研究者たちの普遍化された異議申し立てが、差異というものを閉じられたものとして扱ってしまうこ

とで、しばしば特殊化され、限定されてしまうことを示すことにあるとして、ジェンダーを含めて多様な差異は、ローカルからグローバルまでのスケールで段階づけられ、相互連関の組み合わせとしての場所におけるアイデンティティの構築を見ることで把握されなければならない、身体、セックス、ジェンダー、セクシュアリティの間にあるカテゴリーや連関を攪乱する行為主体論の視点から、本論集の著者たちは、生きられた空間のなかで権力との関係において生成するこうしたパフォーマンスと闘争をさまざまに語ることになるが、それはジェンダーとセクシュアリティの支配的な関係を安定させたり、あるいはその関係を攪乱する権力によって空間性が束縛、許容、あるいは制度として立ち現れるからであると述べている(Duncan 1996: 2-5)。これを認識論のレベルでより具体的に論じているのが第1部1章の哲学者であるリンダ・マーチン・アルコフ論文「フェミニスト理論と社会科学—新しい知、新しい認識論」である。アルコフは、理性を二項対立において捉えることで伝統的な女性性を規定してきた身体—心の二元論は、男性中心主義的な理性論の中心的な特徴であると指摘したうえで、新しいフェミニスト理性論の前提として、心と身体は分離できない、理性の主要な思考とは存在の身体化された反映であることを挙げる。彼女は「ゆえに、私たちは身体—心の二元論を基盤とする社会科学を普及させてきた多くの前提を再考 rethink する必要がある」、そして、身体が性的に特殊的なものであり、社会文化的なものであるなら非身体化され、ジェンダー中立的で普遍的な人間存在の理性論はラディカルに再考されねばならないし、多くの社会科学の認識論は変革されねばならないと述べている(Alcoff 1996: 13-27)。2章のマクドウェル論文「空間化するフェミニズム—地理学的パースペクティブ—」では、空間、場所、転位 dislocation という空間概念を参照するというフェミニスト理論における空間概念の多用を取り上げ

て、状況化された知としてのフェミニスト地理学理論構築が論じられている。彼女は、時間-空間区分に係るマッシーの場所・空間論、不連続で多元国家的なリアリティを捉えようとするカルチュラル・スタディーズのシュワート・ホールの転位 dislocation とアイデンティティの断片化の議論、ホミ・バーバがジェイムソンの「第三空間」概念を引いて析出しようとする「中間的な場 in-between place」についてのポストコロニアル論の議論を参照しながら、個別的なローカリティ、知、場所を基盤としたアイデンティティがグローバル資本主義の不平等で混乱したインパクトにさらされる様相を捉えることが可能な「グローバルローカリズム」、「多様な差異の幾何学」という概念を提起するのである (McDowell1996:28-44)。第2部7章のマッシー論文「男性性、二つの二元論、ハイ・テクノロジー」は「近年のジェンダーのフェミニスト分析において最も重要な要素のひとつは、二元論的思考の探求と脱構築であった。」という文章で始まる。マッシーは、特定の二元論が特定的には男性性を、より一般的にはジェンダー関係を構造化してきたことをケンブリッジのハイ・テクノロジー産業内部とその周辺における生きられた空間、日常生活実践というコンテキストにおいて考察しようとする。検証される二元論の一つ目は、理性/非-理性で、これはもうひとつの二元論である卓越性/遍在性と密接に関連している。卓越性は進歩、歴史の推進、科学的躍進などに属するものであり、男性に、たいていの場合特権的で、才能ある男性に、結びついているとされる。そして遍在性は具象、再生産、他者へのサービスなど「静態的で現存的なるもの static living-in-the-present」に結びつけられるのである。マッシーがハイ・テクノロジー産業労働者の労働評価、職場と家庭の境界、職場での抵抗などのコンテキストの中での二元論の作動を捉えようとするのは、「哲学的な枠組みは、理論的な提議や書かれた言葉に対してのみ存在するわけではな

い。それは日常生活実践の中で再生産されたのだし、少なくとも潜在的に、闘争し、叛乱を引き起こしてもきた」からである (Massey 1996: 109-126)。

以上、論集のごく一部の議論を取り上げただけでも「再 re」という接頭辞は、ダンカンが言うように、普遍主義的言説の「修正や追加」のためではなくその批判自体が形而上学的陥穽に落ちることなく理論革新を進めるための「再-思考」として選択されたことが明確となる。

二番目の事例として検討したいのは、1995年にスーザン・エーキンらアリゾナ大学のフェミニズム研究者たちが中心となって組織した空間的メタファーと物質性をめぐるシンポジウムにおいて、ジェラルディン・プラットがアカデミックな領域における空間・場所に関するメタファーの流通についてフェミニスト地理学者としての立場から行ったコメントである。なおこのコメントは、1998年に論文「フェミニズム理論における地理学的メタファー」としてシンポジウムの報告論文集『世界を作る—ジェンダー、メタファー、物質性』に掲載された (Pratt

1998: 13-30)。まず、プラットは、「位置流動 dislocation」、「逃亡 exile」、「遊牧生活 nomadism」、「周縁化 marginalization」、「境界閼 borderland」、「砂州 sandbar」といった「地理学」のメタファーがフェミニズムにおいてしばしば自己意識や自己位置の感覚表現として使用されるが、地理学者としてはこうしたメタファーが閉鎖領域性を付与してしまうことを危惧せざるをえない、なぜならば、「地理学」の参照がメタファーとして有効性を持つのは、既存の地理学を成立させている基盤においてそれらが静態的な表象装置であるからこそなのだ」と指摘する。そして、フェミニスト地理学者としてのパースペクティヴから言うと、「地理学」、空間、場所は静態的でも自明的でもない、したがって、フェミニスト理論における静態的な「地理学」のメタファーの使用は、政治的な有効性を付与も

するが、同時に脱植民地化したフェミニスト意識と政治を表現する企図における誤読をも招いてしまう可能性がある」と警告し、中心・周縁・その間を往還すること、自由―浮遊する身体、境界／従属主体という三つのテーマでそれぞれ事例をあげて、「地理学」メタファーを検証している。第一のテーマについて、プラットはローズの「パラドックス空間」がベル・フックスの抵抗の場としての周縁性やテレサ・デ・ローレティスのポストコロニアル・フェミニズムの主要特性としての周縁性、逃亡と周縁性、中心と周縁との連続的な往還のメタファーに依拠していることを批判する。このようなメタファーは、カティ・ファーガソンが「動き回る主体」と呼ぶ意識、トリン・T・ミンハが「複数の脱／再―領域化された土地をはだして歩きまわる永遠の―時的な滞在者」のイメージで析出しようとするような主体意識と抵抗の可能性を分節化するために使われてきた。ローズはこれに依拠して、被幽閉者であると同時に逃走者でもある不安定な主体が、中心と周縁、外と内を同時に占拠する「パラドックス空間」を構築しているのである。しかし、プラットは、この「パラドックス空間」の脱構築的意義は認めるが、それを「想像すること」はかなり難しい、なぜならばローズが依拠するベル・フックスやミニ・ブルース・プラットの周縁性というメタファーが、それが依拠した現実の居住地の社会・文化的重層性、脱境界性を十分に捉えきれてはいないからであると言う。そして、メタファーに託される使命は、「考えもつかないもの unthinkable」を感覚的にとらえさせることなのではなく、複雑なものを語るもうひとつの言語の発見なのだからと指摘するのである。第二のテーマである自由―浮遊する身体においてプラットは、フェミニズムにおける「位置流動 dislocation」、「逃亡 exile」、「放浪生活 nomadism」、「周縁化 marginalization」などのメタファーは、しばしば始原の場所としての「ホーム home」を再構築してしまう二元論に陥ること、現実の「居

住 dwelling」という問題あるいは残る者の存在をなおざりにしてしまうこと、移動先の場所においてもその主体の身体は以前の場所と同様の問題を抱え込むことには変わりはないということを失念させることがある、「地理学」がメタファーだけで扱われると場所とアイデンティティの相互作用が分かりにくくなると述べる。境界／従属主体―越境と差異の再生産という第三のテーマについてプラットは、二つの調査事例を挙げて語る。一つ目の調査事例はジェントリフィケーションのもとにあるワシントン D.C. のあるダウンタウンでのフィールド・ワークによって書かれた B. ウィリアムズの民族誌 (1988) である。ダウンタウンの黒人地区は、そこに戸建て家屋を購入して移住してきた「進歩的」な専門職白人と、一本の通りを隔てた賃貸アパートに居住する黒人、一部の黒人の地区脱出によってできた空き部屋に移転してきたエル・サルバルからの難民である「ラティーン」という多様な住民から構成される混住地区となった。ウィリアムズは、テレビ番組の選択から家屋の使い方にいたるまでさまざまな日常生活実践において現出する住民間の差異と住民たちによるその認識が、新たな人種カテゴリーを再生産していること、物質的な境界(家主／借り手、公／私空間の設定とその規範認識をめぐるトラブルなど)が引き直されていくことによって、新たな境界が再構成されていく様相を詳細に記述した。プラットはこの記述から、通りに引かれた境界線は多重的であり、それは異なるイデオロギーによって異なる場所に書き込まれていくことを意味しているのではないのか、この空間的物語ではいったい誰が周縁性と名づけられるのかと問いかけるのである。二つ目の調査事例は、プラットがスーザン・ハンソンと共同で行ったマサチューセッツ州ウスターの女性の就労、居住に関する調査に基づいて既存の境界と空間的分離が女性個人内部にどのような差異をもたらしていくのかを考察するものである。ウスターでは、比較的富裕な中産階級世帯

に属する多くの女性が、専門職を得られず非熟練ホワイトカラー職に就労せざるを得ない。このような女性たちの日常実践は、労働者階級として「働き」、中産階級として「居住する」という矛盾のなかにある。複数の位置によって作り出されるこのような矛盾に対して、女性たちは個人の生活とアイデンティティの区画化によって巧みにそれに対処していくしかない。女性たちは空間におけるアイデンティティの断片化を自らのひとつの身体で生き抜くしかないわけである。しかし逆に、このような中心一周縁間の連続的な往還運動としての日常経験、すなわち都市経験は、都市の文化的、建造環境の変容に対する女性たちの許容度を拡大し、場所における多様性の創造を促進するには有利に働くのではないかと、プラットは言う。主体に関わるフェミニズム理論は、「地理学」と場所をより拡大して論じること、アイデンティティ構築において「地理学」的メタファーと物質的条件が相互に絡み合っていることにより注意を払うことで多くのものを得るのではないかというのがプラットのコメントの結論である。

第三の事例として取り上げるのはマッシーの時空間認識の再吟味と場所・空間論の議論である。1990年代初頭から空間・場所を社会的諸関係、社会プロセスとして関係論的、構築論的に把握しようとしてきたマッシーの議論は、フェミニスト地理学の進展に大きく貢献してきた (McDowell

1996: 29)。「多様な女性のアイデンティティの構築」はつねに特定の空間・場所と結びついている。したがってそれを明らかにするためにはグローバルな資本の空間編成というマクロな次元からローカルな世帯の空間編成というミクロな次元までをジェンダー化された経済、政治、文化、社会的諸関係の動態として把握していく必要がある。このような研究の進展させるうえでマッシーの空間・場所論はきわめて重要な意味を持っているのである。マッシーは1993年の論文「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」では、「場所には単

一の本質的アイデンティティがあるとする観念」、「内面化された起源をもとめて過去を掘り下げ、それに基づいて内面化された歴史から場所のアイデンティティ—場所感覚—が構築される」、「それが境界線の区画化を必要とするように見えること」、「境界線とは、ある地域を囲む閉曲線という意味での枠であり、一方が内側として定義されると他方は必然的にその外側となる」というハイデガーに由来する場所概念を、「このような定義の仕方は、わたしたちと彼/女らを対置する別の形態でもあるのだ。」、「しかし、・・・最初から定義されていた場所などは一つとしてなく、このような想定上の特徴にはあまり現実的な手がかりはない」(マッシー 2003/1993: 38-39)と批判し、「場所の唯一性、つまりロカリティは社会諸関係、そして経験と理解がともに現前する状態のなかで、その特定の相互作用と相互の接合から構築される」、「場所は境界線のある領域ではなく、社会諸関係と理解のネットワークにおいて接合された契機として想像できるだろう。このように考えることで、外に向かって開かれ、広い世界との結びつきを意識し、グローバルなものとローカルなものを積極的に統合していく場所感覚が可能となる」として「場所のオルタナティブな解釈」を提起した(マッシー 2003/1993: 41)。1994年の著作『空間、場所、ジェンダー』第Ⅲ部の序文では、地理学と「ジェンダー」の相互関係および影響はきわめて深く、多様であり、それぞれが、根底のところ、互いの構築に絡み合っている、さまざまに擬装されたかたちで地理学は特定のジェンダーおよびジェンダー関係に影響を与えているし、ジェンダーは「地理学的なるもの」の生産に深く影響しているのだと述べている (Massey 1994: 177)。そして第Ⅱ章：政治と空間／時間のジェンダー・イシュー、において、空間と時間における転位 *dislocation* と政治的可能性についてのエルネスト・ラクラウや1970年代のラディカル地理学の議論を構成する空間と時間の二元論に対し

て、女性が常に欠如態として規定されるジェンダーの二元論および物理学の観点を対置して、時間と空間を二項対立的ではなく相関する関係性において捉える「もうひとつの空間概念」が転位 dislocation と政治的可能性を開くと指摘している (Massey 1994 : 249-272). 2005 年の著作『空間のために』第 5 部 14 章:空間と場所に規範はない、においてマッシーは、グローバリゼーションのもとで「開放性 openness」という語が政治戦略の議論のなかできわめて錯綜した運用のされ方をしているが、こうした多くの議論に筋道をつけるとすればそれはフェミニストではないか、なぜなら「フェミニストは、開放性 openness, 動き movement, 逃避 (脱出という意味での) flight という語を過剰に賞賛することに対して警告を発し続けてきた」のだからと述べている (Massey 2005 : 172-173). そして、カトリーン・ナッシュ、ハンソン、プラット、カプラン、カツらが空間的メタファーのもつ二元論の陥穽について多角的な批判をしてきた事例を挙げ、次いで開放性 openness / 閉鎖性 closure という対立と旧来の領域 territory / リゾーム的なフロー rhizomatic flow という対立の空間概念が相互に関連しあうことで開放性を主張する政治戦略言説がその有効性を失う危険性を検証し、「これまでフェミニストはそれをとおして抑圧的言説が再生産されうる緩やかに連鎖し、時には矛盾する二元的なるものを指摘し続けてきたのだ」、ゆえに「「開放性」という閉じられた地理学的想像力は、閉鎖性がそうであるように、それ自体回復不能に不安定であることに留意すること」が戦略上重要であると、ジャック・デリダの「歓待」の議論を引いて主張している (Massey 2005 : 174-175).

本章の最後、第四の事例として取り上げるのは、シンガポールにおいて移住家事労働者を対象として社会地理学的研究を展開してきたブレンダ・ヨーの「トランスナショナルな光学 optic」をめぐる議論である (Yeoh 2005, ヨー 2007). ヨー

は、今日の人の移動 mobility は一時的で複雑で、さまざまな妨害や迂回、行き先の多元化をともなった多様な移動の連鎖と相互関連のなかにおかれている。したがって、それを把握するためには、新しい概念地図が必要であり、このためにトランスナショナリズムが強調する、空間を「行ったり来たり to-ing and fro-ing」する多様な連関によって描き出される領域という見方は多くの可能性を含んでいると言う。しかし、フェミニストはトランスナショナリズムの視座の意義について両義的な感覚を持ちつづけてきた。ヨーによれば、それにはいくつかの相互関連した理由がある。まず、第一は、彼／彼女の身体を「ここにもあそこにも存在しない」という継続的な状況に置いているのは、トランスナショナルな彼／彼女自身の主体 subject なのか、それとも国家、資本なのかという問題、第二は、「移動しない主体」を視野に入れないトランスナショナルな概念枠組みと結びついた、文化的グローバリゼーションの男性中心主義的な議論傾向への批判、そして第三は、「ディアスポラ」からより「包括的」なグローバリゼーション論まで似て非なる諸概念が重なり合い混乱した領域から「トランスナショナルな光学 optic」が生じてきたわけだが、新しいポキャブラリーへと関心を向けるよりグローバリゼーションの支配的な構造主義的モデル構成、あるいは移動と主体性の問題を中心に据える分析がより重要ではないかという疑義である。ヨーは、「埋め込まれていること embeddedness」と「移動」を特定の文脈において互いに協働し同時に反発するものとして理解することにおいて、「トランスナショナルな光学 optic」は、空間と線分を横断する人とモノの移動を本来的に強調し、同時にそれらの移動の相互関連性を視野に入れる二重焦点レンズとして機能しうるものであり、それが開く地平は、現代の社会生活を支える基礎とされてきた—「家族」、「コミュニティ」、「場所」、「家庭／故郷 home」、「ネーション」、「アイデンティティ」といった諸概念から、

「移動」, 「移動者であること migrancy」, 「一時性 transience」などを含む「越境/逸脱 transgress」し, あるいは「抜錨する unmoor」諸概念といったものまで一を再考する重要な機会を提供するのだと主張する。そして, 人を特定の場所に位置づける「接地 groundings」とそれを不安定化させる「抜錨 unmoorings」との相互作用を捉えようとするフェミニスト地理学研究が, トランスナショナルな家族と女性のアイデンティティの交渉, トランスナショナルな移住女性と国民国家の関係性, 女性のエージェンシーや, 運動, トランスナショナルな市民社会構築などの領域で進展していることを多様な事例から検証し(ヨ一 2007: 154-166), 「フェミニスト地理学者は空間とスケールの交差するポリティクスを理解するうえで潜在的に恵まれた地位にある」のだが, トランスナショナルリズムがフェミニストの取り組みにおいて生産的な分野を構成するかどうかの実験結果は, 「グローバル化する世界地図をより人間的な相貌へと描きかえる可能性をもった「対抗的地勢図 counter topographies」について, フェミニスト地理学者が「理解する」だけでなく, その確立のために学問的実践を違ったかたちで構築できるかどうかにある。」(Yeoh 2005: 71; ヨ一 2007: 166,) と結論している。

以上の四つの事例は, フェミニスト地理学者たちが自分の持ち場である地理学の空間諸概念の再考をとおして, 西欧形而上学の二元論の陥穽はいたるところ仕掛けられており, フェミニストだからといって自動的にその危険から逃れてはいないこと, それを回避するためには「場所は境界線のある領域ではなく, 社会諸関係と理解のネットワークにおいて接合された契機として想像」(マッシー 2003/1993: 41) する力が必要であることを明らかにしてきたことを示すものである。このような空間・場所論によってはじめて, トランスナショナルに移動する女性たちの身体が占拠する空間は, 移動しない, あるいは不可

能な女性たちのそれと連鎖して, 中心と周縁, グローバルとローカルは閉じた二項の対立ではなく, つねに流動する社会諸関係の結節点として把握できる。こうして, 欠如や過剰が刻まれていく移動女性の身体という関係性としての「どこかある場所 somewhere」から「空間的メタファー」が語られるならば, それは「どこにもある場所 everywhere」からの啓蒙主義や「どこにもない場所 nowhere」からの中心を持たないポストモダニズムの相対主義に陥って有効性を失うことを回避でき, 変革のための政治戦略的言説の構築にきわめて有効な役割を果たすのだと, フェミニスト地理学者たちは主張してきたのだと言えるだろう。

V おわりに

本論では, 1993年のマクドウェルの「問い」が, 「空間論的転回」のさなかにあって「多様な女性のアイデンティティ構築における場所の重要性」を「状況化された知」の構築として捉えることがフェミニズム研究とフェミニスト地理学に共通した主要課題へと収斂していく「状況」において発せられていたことを明らかにしたうえで, 「フェミニズム研究者の議論に地理学の類似概念が多用される」, 「現代のフェミニストの著作において空間に言及することが目立つ」という彼女の指摘を手がかりに, この15年間のフェミニズム理論とフェミニスト地理学の議論を検討してきた。Ⅲでは, グローバリゼーションの最新局面である<再生産領域>のグローバルな展開を, 移動女性の身体空間・移動論として読み解こうとするトランスナショナル・フェミニズムの展開が明らかとなった。そして, Ⅳでは, フェミニスト地理学者たちが, 既存の地理学を含む諸科学の認識論が二元論を前提として構築されており, この二元論的思考は多様な日常実践において再生産されていくことを明らかにし, バトラーの行為主体論, ハラウェイの状況化された知の理論, あるいはエ

リザバス・グロスツの身体論などを参照しながら、二元論を乗り越えるために社会的諸関係、社会プロセスとして空間・場所を捉える新たな議論を作ってきたことが明らかとなった¹⁰⁾。この検討から言えることは、フェミニズム理論とフェミニスト地理学は互いに呼応しながら、トランスナショナルに移動する女性の「蝶つがい」状況としての身体空間は、中心/周辺、グローバル/ローカルという空間的対立を中心—周辺、グローバル—ローカルに置き換えるだけではなく、ありとあらゆる静態的な存在を動態的な生成に置き換えるまなざしでしか捉えられないことを明らかにしてきたこと、それはとりもなおさず、グローバル資本主義の空間編成に対抗する新たな空間・場所論の構築の試みであることである。

それではこれによってマクドウェルの「問い」は答えられたことになるのだろうか。答えは「否」である。2008年にパメラ・モスとカレン・ファルコナー・アル・ヒンディは『地理学におけるフェミニズム—空間、場所、知の再考』を編集出版した(Moss&F.Al-Hindi 2008)。編者たちは、書き下ろし、リプリントを含めて23人のフェミニスト地理学者の論考が収められているこのアンソロジーを「反—アンソロジー」の試みであると言う。フェミニスト地理学の蓄積を振り返り、その意義を確認するために「アンソロジー」は不可欠であるが、もしそれが「カノン」として提示されてしまうならそれはもはやフェミニスト地理学を語るものではなくなる。なぜなら、フェミニスト地理学の知は、ドゥルーズとガタリが言う「リゾーム的な思考方法」、つまり「水平に拡散していく結節や節間からなる絡み合った地下根茎のシステム」、「異なった速さで伸びていき、互い違いの方向に枝を張っていくリゾーム」(Moss&F.Al-Hindi 2008: 12)のように産出されていくものであり、フェミニスト地理学は「マイナー性になるプロジェクト *minoritarian project*」(Moss&F.Al-Hindi 2008: 249)だからである。したがって、フェ

ミニスト地理学のアンソロジーは、「正統性を標榜する権威的なものへの異議申し立てとフェミニスト地理学の知の産出を不安定化することの中間的空間 *interim space* に位置付けられる反—アンソロジー」(Moss&F.Al-Hindi 2008: 247)となるわけである。このために編者たちは、選択した論文の内容の多様性のみならず、複数の構成での読解がありうることを示すために論文の順序を並べ替えた複数の目次の提示、英語圏フェミニスト地理学の権威性や優位性の問い直しのために英語だけではなくドイツ語やヒンディ語で書かれた論文を翻訳なしに提示するなど、さまざまな複数性を取り入れる工夫を凝らしている。「反—アンソロジー」とは、その読解を契機にあらゆるもの、例えば、ジェンダーという分析概念はもちろんのこと編者たちが拠って立つ「リゾーム」や「マイナー性になる」という比喻でさえも例外なく¹¹⁾、そこで再審に付され、問いの答えが新たな問いになる書物なのである。このような「反—アンソロジー」の出現は、マクドウェルの「問い」は決して答えられることがない、つまりフェミニスト地理学とは、終わることのない問いの生成に他ならないことを示唆しているのではないだろうか。

注

- 1) *Progress in Human Geography* 17-2・3 (1993) に掲載されたこの論文の日本語訳は1998年に空間・社会・地理思想第3号に掲載(翻訳者第1部吉田容子, 第2部影山穂波), 2002年に神谷浩夫編監訳『ジェンダーの地理学』(古今書院)に再録された。本論文の頁表示は後者に拠っている。
- 2) 空間や移動にかかわる語の英語から日本語への翻訳は、例えば、*location* が場所、立地、位置、居場所などと訳者によってきわめて多様である。本論文では日本語訳書に拠る場合はそのままの訳語に英語を付記した。
- 3) 1970年代からフランスの思想家アンリ・ルフェーヴルの空間論(2000/1974)を契機として資本主義の空間編成をめぐる議論が、地理学、社会学、カ

- ルチュラル・スタディーズなど人文、社会科学領域において互いに交差しながら展開されるようになった。(上野 1999, 2000; 吉見 2003; 南後 2006) を参照。
- 4) ハンガリーの哲学者ジョルジョ・ルカーチの労働者階級の意識化についての議論を参照して、ナンシー・ハーツック (1983) らは、女性の位置 location と世界認識の相関性に注目し、すべての知識は状況に埋め込まれたもの *Situated knowledge* であることを主張し、科学哲学、科学社会学、科学研究方法論からその研究実践の政治的意味まで広く議論が展開されるようになった。「女性」カテゴリーの理解が一元的であるとの批判がなされ、現在では多元的な理解へと修正されている。
 - 5) ラテンアメリカ、アジア地域研究者であった彼女たちは、第三世界の現実を、ローザ・ルクセンブルグの資本蓄積論、イマヌエル・ウォーラステインの近代世界システム論の批判的検討において説明し、本源的蓄積が継続していること、賃労働の風化を「主婦化」という概念で捉えた。足立は、彼女たちの議論は移動論を欠いており、ナショナルな分析枠組みにとどまってしまったと指摘している。(ミーズ他 1995/1988; ヴェールホフ 2004/1991; 足立 1999 対談における pp.62-69 の足立発言) を参照。
 - 6) 足立は「切り捨てられ、使い捨てられてもおお滞留する」このような社会層とは、場としてのグローバル・シティの重要性を示し、さらに「資本の時間的・空間的制約の解除という欲望が、なおも、一定のリアルな空間である身体によって阻まれるという喜劇」なのだと見る (足立 2005b: 112)。また、サンドロ・メツァドーラは、「所属という領域に生じてくる脱節合の総体を同時に考慮することなく、もはや労働者階級について語ることは不可能」、「ここではもう取り返しのつかないかたちで労働者階級はマルチチュードとして形成されている」(メツァドーラ 2008/2004: 79) と指摘する。
 - 7) パレーニャスは、「ホーム home」という語を家庭、親密空間、故郷、故国として使い分けるが、それは物質的な空間であり、同時にメタファーでもある。「ホーム」に関する文化地理学の諸議論については福田 (2008) を参照。
 - 8) メツァドーラは、移民の主観的実践についての論考において、私たちは再生産領域の労働というものを持つ「途方もなく両義的な意味を有する過程に向かい合っている」わけだが、そこでパレーニャスのような研究が蓄積していけばこのような言説を深め、精緻化していけるだろうと述べている(メツァドーラ 2008/2004: 78)。
 - 9) 足立は、トランスナショナル・フェミニズムの課題を、「グローバル化とヘゲモニーに関わるジェンダー化の問題と資本主義の構造におけるあらかじめの排除、むしろ資本主義的構造をそれ自体として成立させていると思われる基盤における排除」を考えていくことだと指摘し、『偶発性・ヘゲモニー・普遍性』(2002)におけるパトラーとジジェクの議論を引いて、資本主義の自己増殖する価値の過程が、繰り返しの再生産にはいる最初の瞬間に資本主義的なヘテロセクシュアリティ強制が発動すると見るかどうかのポイントとなると述べている(足立 2003a 対談における足立発言) を参照。
 - 10) フェミニスト地理学者だけが、西欧近代形而上学批判を行ってきたわけではない。彼女たちは地理学界における多様な議論に積極的に係わり、それを担ってきたのである。1980年代からの英語圏人文地理学における文化論転回以後の諸議論については森 (2009) を参照。
 - 11) 編者たちは結論において、ジェンダー概念を再考することは、地理学におけるフェミニズムを「終わりのない、最終的決定的なゴールのない、あらかじめ与えられた目的や企図のない、そしてプロセス、生成するもの、物質的なものを研究する、それ自体外部であるものに自らを参画させるフェミニズム」に向かい合わせることなのだと述べている (Moss & F.Al-Hindi 2008: 254)。また、カプランは、ドゥルーズリとガタリの「リゾーム」、「ノマド的主体」、「マイナー性になる」という「脱領域化」のメタファーは近代における中心/周縁の地政学であって、ポストモダンな時代における資本と権力の複雑な越境的回路ではないと批判する (カプラン 2003/1996: 160-169)。

文 献

- 足立真理子 1999. 対談 グローバリゼーションとジェンダー. 現代思想 27-12 : 58-99.
- 足立真理子 2003a. 対談 トランスナショナル・フェミニズム—性的差異の所在. 現代思想 31-1 : 30-47.
- 足立真理子 2003b. 予めの排除と内なる排除—グローバル化の境界域. 現代思想 31-1 : 86-92.
- 足立真理子 2005a. 「従属」の取引. 現代思想 33-9 : 148-153.
- 足立真理子 2005b. グローバル資本主義・グローバル化へのフェミニスト政治経済分析. SGCIM 編『模索する社会の諸相』105-117. お茶の水書房.
- 足立真理子 2005c. 再生産のグローバル化と複数のグローバル化. F-Gen ジャーナル3:110-114.
- 足立真理子 2008. 再生産領域のグローバル化と世帯保持. 伊藤るり・足立真理子編『国際移動と連鎖するジェンダー—再生産領域のグローバル化』作品社, 227-231.
- 稲葉奈々子 2003. 都市を取りもどす人々 グローバル化と「場所」のポリティクス. 現代思想 31-6:177-189.
- 伊藤るり・足立真理子 2008. 序文. 伊藤るり・足立真理子編『国際移動と連鎖するジェンダー—再生産領域のグローバル化』5-17. 作品社
- 上野俊哉 1999. 空間論的転回 その後. 現代思想 27-13 : 72-79.
- 上野俊哉 2000. 空間論的転回 その後 (承前). 現代思想 28-1 : 22-41.
- 影山穂波 2006. フェミニスト地理学—ジェンダー概念と地理学—. 加藤政洋・大城直樹編著『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房, 251-262.
- 神谷浩夫編監訳 2002. 『ジェンダーの地理学』古今書院
- 竹村和子 2003. 「いまを生きる」“ポスト”フェミニズム理論. 竹村和子編『“ポスト”フェミニズム』作品社, 106-117.
- 南後由和 2006. アンリ・ルフェーヴル—空間論とその前後. 加藤政洋・大城直樹編著『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房, 190-209.
- 福田珠己 2008. 「ホーム」の地理学をめぐる最近の展開とその可能性—文化地理学の視点から—. 人文地理 60-5 : 23-42.
- 森正人 2009. 言葉と物—英語圏人文地理学における文化論的転回以後の展開. 人文地理 61-1 : 1-22
- 吉田容子 1996. 欧米におけるフェミニズム地理学の展開. 地理学評論 69-4 : 242-262.
- 吉田容子 2004. ジェンダー研究と地理学. 水内俊雄編『空間の社会地理』朝倉書店, 57-79.
- 吉田容子 2006. 地理学におけるジェンダー研究—空間に潜むジェンダー関係への着目. *E-journal GEO* 1-0 : 21-29.
- 吉見俊哉 2003. グローバル化と脱(ディス)—(一)配置(ロケット)される空間. 吉見俊哉『カルチュラル・ターン, 文化の政治学へ』人文書院, 132-174.
- Aiken, S., Brigham, A., Marston, S. A., and Waterstone, P., eds. 1998. *Making Worlds: Gender, Metaphor, Materiality*. Tucson: The University of Arizona Press.
- Alcoff, L.M. 1996. Feminist theory and social science: New knowledges, new epistemologies. In *Bodyspace: Destabilizing geographies of gender and sexuality*, ed. N. Duncan. 13-27. London and New York: Routledge.
- Buttler, J. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York and London: Routledge. 竹村和子訳 1999. 『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.
- Buttler, J. 1997. *Excitable Speech: A Politics of the Performative*. New York and London: Routledge. 竹村和子訳 2004. 『触発する言葉 言語・権力・行為体』岩波書店
- Buttler, J., Laclau, E. and Žižek, S. 2000. *Contingency, Hegemony, Universality: Contemporary dialogues on the left*. London: Verso. 竹村和子・村上敏勝訳 2002. 『偶発性・ヘゲモニー・普遍性: 新しい対抗政治への対話』青土社
- Dear, M. 1988. The postmodern challenge: reconstructing human geography. *Transactions of the Institute of British*

- Geographers NS*. 13:262-274.
- Deleuze, G. and Guattari, F. 1980. *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie 2*. Paris:Minuit. 宇野邦一他訳 1994. 『千のプラトー』 河出書房新社.
- Duncan, N. ed. 1996. *Bodyspace: Destabilizing geographies of gender and sexuality*. London and New York: Routledge.
- Duncan, N. 1996. (Re) placing. In *Bodyspace: Destabilizing geographies of gender and sexuality*, ed. N. Duncan. 1-10. London and New York: Routledge.
- Elson, D. and Pearson, R. 1981. Nimble fingers make cheap workers: An analysis of women's employment in the Third World export manufacturing. *Feminist Review* 7:87-107. 神谷浩夫訳 2003 「器用な指が安い労働者を生み出す」ののだろうか. 神谷浩夫編監訳 『ジェンダーの地理学』 218-249.
- Grosz, E. 1994. *Volatile Bodies: Toward a corporeal feminism*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.
- Haraway, D. 1991. *Simians, Cyborgs and Women: The reinvention of nature*. London and New York: Routledge. 高橋さきの訳 2000. 『猿と女とサイボーグ 自然の再発明』 青土社.
- Harding, S. 2006. *Science and Social Inequality: Feminist and postcolonial issue*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. 森永康子訳 2009. 『科学と社会的不平等 フェミニズム, ポストコロニアリズムからの科学批判』 北大路書房.
- Hartsock, N. 1983. The feminist standpoint: Developing the ground for a specifically feminist historical materialism. In *Discovering Reality: Feminist perspective on epistemology, metaphysics and philosophy of science*, eds. S. Harding and M. Hintikka. 2003. 283-310. Dordrecht: Reidel.
- Harvey, D. 1989. *The Condition of Postmodernity*. Oxford: Basil Blackwell. 吉原直樹訳 1999. 『ポストモダニティの条件』 青木書店.
- Heitlinger, A. 1999. *Émigré feminism: An introduction*. In *Émigré Feminism: Trans-national perspectives*, ed. A. Heitlinger. Toronto: University of Toronto Press. 徳永理彩訳 2003. エミグレ・フェミニズム. 現代思 31-1: 93-103.
- Kaplan, C. 1987. Deterritorializations: The rewriting of Home and Exile. *Cultural Critique* 6:187-198.
- Kaplan, C. 1990. Recofigurations of geography and historical narrative. *Public Culture* 3-1:25-32.
- Kaplan, C. 1996. *Questions of Travel: Postmodern discourses of displacement*. Durham, NC and London: Duke University Press. 村山淳彦訳 2003. 『移動の時代—旅からディアスポラへ』 未来社.
- Kaplan, C. 1998. On location. In *Making Worlds: Gender metaphor, materiality*, eds. S. Aiken, A. Brigham, S. A. Marston, and P. Waterstone. 60-65. Tucson: The University of Arizona Press.
- Kaplan, C. and Grewal I. 1994. Transnational feminist cultural studies: Beyond the Marxism/poststructuralist/feminism divides. *Positions: East Asia Cultures Critique* 2-2: 430-445.
- Lefebvre, H. 1974. *La Production de l'espace*. Paris: Editions Anthropos. 斎藤日出治訳 2000. 『空間の生産』 青木書店.
- Massey, D. 1991. Flexible sexism. *Environment and Planning D: Society and Space* 9-1:31-57 (Reprinted in *Space, Place and Gender*, D. Massey. 1994. 212-248. Cambridge: Polity Press)
- Massey, D. 1993. Power-Geometry and progressive sense of place. In *Mapping the Futures: Local culture, global change*, eds B. Curtis and P. Robertson. 59-69. London and New York: Routledge. 加藤政洋訳 2003. 権力の幾何学と進歩的な場所感覚. 思想 933:32-44.
- Massey, D. 1996. Masculinity, dualisms and high technology. In *Bodyspace: Destabilizing geographies of gender and sexuality*, ed. N. Duncan. 109-126. London and New York: Routledge.
- Massey, D. 2005. *For Space*. London: Sage Publications.
- Maasey, D. and Jess, P. eds. 1995. *A Place in the World?* Oxford: The Open University.
- McDowell, L. 1992. Multiple voices: On being inside and outside the project. *Antipode* 24: 56-72.
- McDowell, L. 1993a. Space, place and gender relations Part I: Feminist empiricism and the geography of social relations. *Progress in Human Geography* 17-2:157-179.

- 吉田容子訳 1998 = 2002. 空間・場所・ジェンダー関係 : 第1部—実証主義フェミニズムと社会関係についての地理学. 神谷浩夫編監訳『ジェンダーの地理学』古今書院, 21-54.
- McDowell, L. 1993b. Space, place and gender relations Part II; Identity, difference, feminist geometries and geographies. *Progress in Human Geography* 17-3:303-318. 影山穂波訳 2002. 空間・場所・ジェンダー関係 : 第2部—アイデンティティ, 差異, フェミニスト幾何学と地理学. 神谷浩夫編監訳『ジェンダーの地理学』古今書院, 55-76.
- McDowell, L. 1996. Spatializing feminism: geographic perspective. In *Bodyspace: Destabilizing geographies of gender and sexuality*, ed. N. Duncan. 28-44. London and New York: Routledge.
- McDowell, L. 1999. *Gender, Identity and Place*. Cambridge: Polity Press.
- McDowell, L. 2000. Act of memory and millennial hope and anxieties: The awakened relationships between the economic and the cultural. *Social and Cultural Geography* 1-1:15-24. 加藤政洋訳 2001. 記憶の行為ならびに千年紀の希望と不安—経済的なものと文化的なものとのぎこちない関係. 空間・社会・地理思想 6:142-149.
- Mezzadra, S. 2004. Capitalismo, migrazione e lotte sociali: Appunti per una teoria dell'autonomia delle migrazioni. In *I confini Della liberta per un'analisi politica Delle Migrazioni Contemporenee*, a cura di. S. Mezzadra. 7-19 Roma: Derive Approdi. 北川真也訳 2008. 社会運動として移民をイメージせよ?—移民の自律性を思考するための理論ノート. 空間・社会・地理思想 12: 73-85.
- Mies, M., Benholdt-Thomsen, V. and von Werlhof, C. 1988. *Women: The last colony*. London: Zed Book. 古田睦美他訳 1995. 『世界システムと女性』藤原書店
- Mohanty, C. T., Russo, A. and Torres, L. eds. 1991. *Third World women and the Politics of Feminism*. Bloomington Indiana: Indiana University Press.
- Monk, J. & Hanson, S. 1982. On not excluding half of the human in geography. *Professional Geographer* 34:11-23. 影山穂波訳 2002. 人文地理学において人類の半分を排除しないために. 神谷浩夫編監訳『ジェンダーの地理学』古今書院, 2-20.
- Morokvasic, M. 2004. Settled in mobility: Engendering Post-wall migration in Europe. *Feminist Review* 77:7-25. 本山央子訳 2005. 移動の中への定住ヨーロッパにおけるポスト「壁」移動のジェンダー分析. 現代思想 33-10:154-171.
- Moss, P. and Falconer Al-Hindi, K. eds. 2008. *Feminisms in Geographies: Rethinking space, place and knowledges*. Plymouth: Rowman & Little Field Publishers.
- Murata, Y. 2005. Gender equality and progress of gender studies in Japanese geography: A critical overview. *Progress in Geography* 29-3:34-44.
- Nelson, L. & Seager, J. eds. 2005. *A Companion to Feminist Geography*. Hoboken, NJ, John Wiley & sons.
- Parreñas, R. S. 2001. The international division of reproductive labor, servants of globalization: Defferent settings, pararelle lives. In *Servants of Gobalization: Women, migration and domestic work*. R. S. Parreñas. Stanford: Stanford University Press. 小ヶ谷千穂訳 2002. グローバリゼーションの使用者(サーバント)ケア労働の国際的移動. 現代思想 30-7: 158-181.
- Parreñas, R. S. 2001. *Servants of Gobalization: Women migration and domestic work*. Stanford: Stanford University Press.
- Parreñas, R.S. 2005. The geographies of race and class: The place and placelessness of migrant Filipina domestic workers. Paper given at the 18th Institute for Gender Studies Evening Seminar Series, Ochanomizu University. 1-17.
- Parreñas, R.S. 2007. 女はいつもホームにある: グローバリゼーションにおけるフィリピン女性家事労働者の国際移動. 伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う 現代移民研究の課題』有信堂, 127-147.
- Parreñas, R. S. 2008. 家族を想うということ—フィリピン人海外就労の経済的原因におけるジェンダー作用. 越智方美・大橋史恵訳. 伊藤るり・足立真理子編『国際移動とく連鎖するジェンダー—再生産領域のグローバル化』作品社, 154-171.
- Pilcher, J. and Whelehan, I. 2004. *Fifty Key Concepts in Gender Studies*. London: Sage. 片山亜紀記者代表 2009

- 『キーコンセプト ジェンダースタディーズ』新曜社.
- Pratt, G. 1998. Geographic metaphors in feminist theory. In *Making Worlds: Gender, metaphor, materiality*, eds. S. Aiken, A. Brigham, S. A. Marston and P. Waterstone. 13-30. Tucson: The University of Arizona Press.
- Pratt, G. and Hanson, S. 1988. Gender, class and space. *Environment and Planning D Society and Space* 6:15-35.
- Rose, G. 1993. *Feminism and Geography: The limit of geographical knowledge*. Cambridge: Polity Press. 吉田容子他訳 2001. 『フェミニズムと地理学 地理学的知の限界』 地人書房.
- Sassen, S. 1996. *Losing control?: Sovereignty in an age of globalisation*. New York: Columbia University Press. 伊豫谷登士翁訳 1999. 『グローバリゼーションの時代 国家主権のゆくえ』 平凡社.
- Sassen, S. 1998. *Globalization and its Discontents: Essays on the new mobility of people and money*, with foreword by A. Appiah. 田淵太一他訳 2004. 『グローバル空間の政治経済学 都市・移民・情報化』 岩波書店.
- Sassen, S. 2000. *Cities in a world economy, the second ed.* Thousand Oaks, London, New Delhi: Pine Forge Press
- Sassen, S. 2001. *The Global City New York, London, Tokyo*, the Second ed. Princeton and Oxford: Princeton University Press. 伊豫谷登士翁監訳 2008. 『グローバル・シティ』 筑摩書房
- Sassen, S. 2002. Analytic Borderlands: Economy and culture in the global city. In *Crossing Borders and Shifting Boundaries vol. II: Gender, identities and networks*, eds. Lenz et al. 130-143. Opladen: Leske + Budrich.
- Sassen, S. 2003. The feminization of survival: Alternative global circuits. In *Crossing Borders and Shifting Boundaries vol. I: Gender on the move*, eds. M. Morokvasic et al. 58-77. Opladen: Leske + Budrich.
- Soja, E. 1989. *Postmodern Geographies: The reassertion of space in critical social theory*. London: Verso. 加藤政洋他訳 2003. 『ポストモダン地理学 批判的社会理論における空間の位相』 青土社
- Soja, E. 1996. *Thirdspace: Journey to Los Angeles and other real-and-imagined place*. Oxford: Blackwell. 加藤政洋訳 2005 『第三空間 ポストモダンの空間論的転回』 青土社.
- Von Werlhof, C. 1991. *Was haben die Heuhner mit dem Dollar zu tun?: Faren Frauen und Oekonomie*. München Verlag: Frauenoffensive. 伊藤明子訳 2004. 『女性と経済 主婦化・農民化する世界』 日本経済社.
- Williams, B. 1988. *Upscaling Downtown*. Ithaca: Cornell University Press
- Yeoh, B. S. A 2005. Transnational mobilities and challenges. In *A Companion to Feminist Geography*, eds. L. Nelson, and J. Seager. 60-73. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Yeoh, B. S. 2007. 女性化された移動と接続する場所；「家族」「国家」「市民社会」と交渉するトランスナショナルな移住女性。小ヶ谷千穂訳伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う 現代移民研究の課題』 有信堂, 149-170.

いしづか・みちこ

お茶の水女子大学大学院教授

The quest never ends Rethinking of “Space, place and gender relations”

ISHIZUKA Michiko (Ochanomizu University)